

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	栗山 緑
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
日本の「あし文化」に関する多角的研究			
論文審査担当者			
主 査 教授 町田 宗鳳			
審査委員 教授 吉村 慎太郎			
審査委員 教授 安仁屋 宗正			
審査委員 教授 高谷 紀夫			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本研究は、ヒトの「からだ」を文化的表象体とする見地から、日本人の「あし」の文化性を多角的に追究し、それを「あし文化」と呼んで論考したものであり、八章から構成されている。</p> <p>序章では、日本文化における「あし」の役割には、歴史的な多様性があるにも関わらず、妥当な評価がなされていないとことを指摘し、第一章では、日本人の「あし」の形態的および機能的特徴に注目し、科学的分析が可能なものと、そうではないものに分け、後者については文化的事象として分析を加えている。</p> <p>第二章では、日本人の「歩容」を「自然歩行」と「特殊歩行」に大別し、とくに前者の中の「引き摺り足」、「内股歩行」・「小股歩行」・「つま先歩行」・「急か急か歩行」などの「癖歩行」を検討対象としている。第三章では、(1)日本人にとって「坐」の意味、(2)「坐」の多様な形態、(3)「坐」に深く関わる「膝」の役割の三点から「坐」の文化性を考察している。</p> <p>第四章では、「あし」の形態的及び機能的な論考を踏まえ、言語的視座から「あし」に対する考察を展開している。たとえば「腹がたつ」、「肩身がせまい」など「からだ」の部位名称を使った比喩表現である身体語彙に注目し、言語的分析を加えている。日本語の「からだことば」は、「からだ」のすべての部位（名称）に存在するうえ、その数は他に類をみないほど豊富にあると言われているが、そこに反映される日本人の「あし」に対する独特の感覚が分析されている。</p> <p>第五章では、日本人が「あし」を汚きものとみなす感覚を持つ一方で、「汚いあし」と最も清潔であるべき「食べ物」とを同等に扱う「餅踏み」儀式や「足踏み製法」などの事象について論じている。また、日本人の「あし」概念のなかで最も独自性の強い「あしのない幽霊」についても考察を試みている。また、キャロル・リンツラーの『LEONARDO' S FOOT』（2013）を概観しながら、欧米社会における「あし」の概念と日本のそれとを比較検討している。</p> <p>第六章では、日本人の「あし」と履物の関係について考察し、日本には独自の履物着脱の慣習があり、それが日本人の衛生観と密接に関係していることを論じている。履物の着脱については、それを専門とする役職や作法、さらには着脱に関する慣用句・ことわざ・昔話が存在しており、履物に投影された日本の「あし文化」の多様性を探っている。</p> <p>最終章においては、「手の日本人」や「手の国」と、「手」の役割が大きく評価されている一</p>			

方で、「あし」の功績が看過されてきた事実を指摘している。「あし」が多様な文化形成の立役者として働いてきたにも関わらず、日本人がなぜ「あし」に対する消極的評価を下してきたかについても、その原因を探っている。最後に本研究の総括と自己評価をし、日本の「あし文化」再構築に向けた積極的提言をもって全体を締め括っている。

日本人の「あし」がもつ個々の文化性についての卓越した先行研究はあまた存在するが、やや荒削りの文章表記が見受けられるものの、本論文はそれらを「あし文化」として総括的にとらえる視座に立ち、多面的な分析を加えているところに研究の独自性がある。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は，1,500 字以内とする。